



空襲の翌日に撮影された、本町通りと麻屋百貨店方面（故 田村秀市さん撮影）

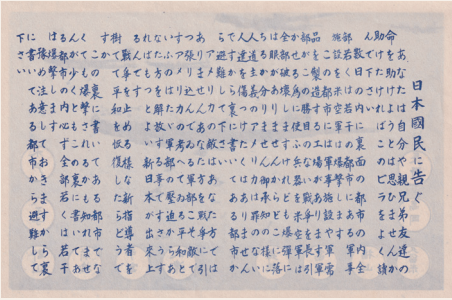
終戦からわずか10日前の昭和20年8月5日。この日の本市は朝から晴天で風も無く、とても蒸し暑い日だったそうです。21時に警戒警報、21時45分には空襲警報が鳴り響きました。22時30分、本市上空東側から爆音を轟かせながら、92機のアメリカ軍機B29が次々とやってきました。アメリカ軍は1時間半以上攻撃を続け、約724

77年前、前橋で起きた事

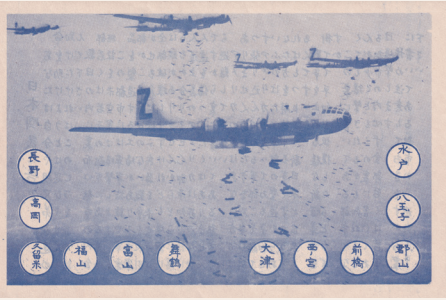
トの爆弾を投下。木造家屋が大部分であった市内は瞬く間に炎に包まれ、市街地の約8割が焦土と化しました。当時の前橋地域の死者は535人。負傷者は600人以上。先人たちが築いた街並みは破壊され、かけがえのない多くの命が一晚にして奪われました。

この空襲で最も多くの死者を出した場所は、広瀬川に架かる比刀根橋わきの防空壕と細ヶ沢十字路口（住吉町一丁目）の水路でした。市内で模範とされていた比刀根橋の防空壕周辺は、一面火の海となり、壕内に入った多くの人々が煙と熱気で窒息死しました。また、十字路では、市外へ逃げる途中の人たちが、猛火に巻かれ水路の中で死んだのです。そして、10日後の15日、日本は無条件降伏し、終戦を迎えました。

（出典：「戦災と復興」昭和39年発行）



本市をはじめ、各地に散布された空襲を予告する伝単「マリアナ通信」



旧あたご歴史資料館敷地内に復元した防空壕
※中に入ることはできません。



原田 恒弘さん
（住吉町二丁目）

今も残る、空襲の記憶

「当時は国民学校2年の7歳でした。22時頃に空襲警報が鳴り、アメリカ軍の爆撃機が前橋の上空へ飛来。私は広瀬川の比刀根橋わきの防空壕に逃げ込みました。ここは市内でも随一の防空壕で、ここへ避難すればいかなる攻撃にも耐えられると言われていました。そのため、収容人数に対して倍の人々が押し寄せました。空襲が進むと炎が壕の中へ入ってきて煙が充満し中の人々のかまどの中にあるような状態になりました。助かったのは自分を含めた数人。中で多くの人が苦しみながら死んでいったのを今でも覚えています。」



未来の平和のために
戦争の記憶
引き継ぐとき

問 秘書広報課
027・898・5847

広瀬川に架かる比刀根橋